

**晩期マルクスが直面した諸問題
「歴史的生活過程」関連**

大阪労働学校

2023.01.25

田畑 稔

田畑稔2022年度後期講義 「生活過程論」で読むマルクス ——「21世紀のマルクス」へ

- 10/26 第1講 (個人的生活過程・関連)
「生きる」思想について
- 11/30 第2講 (物質的生活過程・関連)
マルクスにおいて唯物論は何を意味したのか
- 12/21 第3講 (現実的生活過程・関連)
現実性、意識、イメージ、そして幻想
——現実性と実在性の差異
- 01/25 第4講 (歴史的生活過程・関連)
晩期マルクスが直面した諸問題

マルクス思想の 「19世紀問題」「20世紀問題」「21世紀問題」

(1)「20世紀問題」

1917年2月と10月のロシア革命から1991年の「ソ連邦崩壊」にいたるいわゆる「ソ連型社会主義」をどう総括するか

(2)「19世紀問題」

ML主義の縛りを解いて、マルクスの画期的意義と歴史的限界を彼が生きた現実 に即して再読する

(3)「21世紀問題」

人類史的課題山積の現状に対するオルタナティブの実践的構築においてマルクスから何を摂取し、マルクスをどの方向に「開く」べきか

「21世紀世界」を扱う「大きな」思想の不可欠性 21世紀の山積する人類史的課題

- (1) 資本主義を「超える」
- (2) 人類の脱戦争という課題
- (3) 地球環境危機、特に温暖化危機
- (4) 民主主義の危機、権威主義体制と右翼ポピュリズムの拡大
- (5) 不均等発展と覇権国家の地位をめぐる米中衝突
- (6) 南北問題、人口爆発、貧困問題
- (7) 情報革命(情報技術革命)の光と影
- (8) 人権とグローバル・ガバナンスの低水準

マルクス「生活過程」全体図(暫定)

I. 「総過程」

「現実的生活過程」 現に作動しつつある存在様相下に見られた「総過程」

「社会的 (gesellschaftlich) 生活過程」 単位社会における「総過程」

「歴史的生活過程」 マクロな変容過程として見られた「総過程」

II. 「生命過程」 人間たちの「生活過程」の地盤 (element) をなす過程
地球環境下の生命史的生態学的過程
ヒトおよび「身体的生活過程」(生理学的身体過程)

III. 「部分過程」 その端初規定

「物質的生活過程」生活諸手段の生産・分配・交換・消費の行為・構造・過程

「社会的 (sozial) 生活過程」 人間たちの相互諸行為、その構造・過程

「政治的生活過程」 「社会の公的総括」の行為・構造・過程

「精神的生活過程」 認識、価値判定、行為コントロールの活動・構造・過程

IV. 「[個人的]生活過程」

「総過程」を〈織り込み〉つつ営まれる人格的 (persönlich) 生活過程

マルクスと「総過程」いくつかの事例

(1)『経済学批判要綱』(1857/58)序論MEGAI-1-35

生産、分配、交換、消費はすべて「一つの全体の諸分枝(Glieder einer Totalitaet)」をなす。生産は包括する(力を及ぼすübergreifend)契機として他を規定するが、生産自身もその一面的形態においてあるものとしては、他の諸契機により規定され、諸契機間の相互作用が生じる。

(2)『資本論』「機械体系」で「総過程(Gesamtprozess)」「部分過程(Teilprozess)」「特殊過程(Sonderprozess)」「段階諸過程(Stufenprozesse)」を用いて説明している(MEW23-401)。

(3)『資本論』第2部第3編「社会的総資本の再生産と蓄積」では、「総過程」は相互に独立な個別諸資本の循環が絡み合い(Verschlingung)、相互前提、相互条件づけのなかで行う運動の総体である(MEW24-352)。

(4)『資本論』第3部「資本主義的生産の総過程(Gesamtprozess)」は「[生産過程と循環過程の]全体として観察されたものとしての資本の運動過程から生起する具体的諸形態[価格、利潤、利子、地代など]を見出して叙述する」つまり「社会の表面で色んな資本の相互アクション、競争において、また生産当事者の通常意識に立ち現れる形態に一步一步近づく」(MEW25-33)

(5)しかしこれらはすべて「資本家的生産様式が支配する(herrschen)社会」(MEW25-49)の、支配的な(herrschend)生産や交換の様式(「資本一般」)の「総過程」、またその枠内のあれこれの部分過程を「総過程」として捉えたものである。総過程の各契機はそれ自身、諸過程の総体でもある。(ヘーゲルの「生命過程」参照)

歴史の諸層・概観

- 宇宙史(137億年) ビッグバンと生成
- 地球史(45億年) 大気、水、オゾン層etc
- 生命史(40億年) 進化(環境変動+個体変異)
- 人類史(700万年) 直立二足歩行、道具使用
- 現生人類史(16万年)
- 文明史(1万年) 農業革命、産業革命、情報革命
- 地域史(部族史、民族史、一国史)
- 世界史(帝国史、「近現代世界システム」500年)
- 人格史、家族史

マルクスの主な歴史叙述と歴史観記述

1845/46『ドイツ・イデオロギー』

1848.02『共産党宣言』

1850『フランスにおける階級闘争』(1895年版エンゲルス自己批判)

1852.05『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』(ボナパルト権力の秘密を解く、再演的構想力、前景後景)

1853『パーマストン伝』(MEW9)、1854『東方問題』(MEW9、10, 11)

1856/57『18世紀の秘密外交史』(石堂訳、三一書房)

1857/58『経済学批判要綱』所収「資本主義的生産に先行する諸形態」

1859.06『経済学批判』序言(いわゆる「唯物史観」の「定式」)

1871.05『フランスの内乱』(パリ・コミューンの歴史的意味)

1881.02-03 ザスーリッチへの手紙草稿

マルクスの同時代外交・戦争分析

1853『パーマストーン伝』(MEW9)

1854『東方問題』(MEW9、10、11)

1856/57『18世紀の秘密外交史』(石堂訳、三一書房)石堂の訳者序、参照

1857(?)『ルーマニア史ノート』(萩原直訳、大月書店、1979)萩原の「訳者解説」参照。

1860年代『ポーランド史ノート』

同上『アイルランド史ノート』

マルクスの世界史像、歴史理論に関連する若干の文献

ヘーゲル『歴史哲学講義』、ガンス編(1837)、カール・ヘーゲル編(1848)

K・ポツパー『歴史主義の貧困』原1957、久野収・市井三郎訳、中央公論社

E.H.カー『歴史とは何か』原1961、近藤和彦訳、岩波書店

山内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』1969、未来社

淡路憲治『マルクスの後進国革命象』未来社、1971

望月清司『マルクス歴史理論の研究』1973、未来社

サイード『オリエンタリズム』原1978、板垣雄三ほか訳、平凡社

小谷汪之『マルクスとアジア——アジア的生産様式論批判』青木書店、1979

植村邦彦『シュルツとマルクス』1990、新評論

アンダーソン『周縁のマルクス——ナショナリズム、エスニシティ—および非西欧社会』原2010、平子友長監訳、社会評論社

マルクスの生涯・主な時期区分 メーリング『マルクス伝』(原1918)

1章 少年時代

初期マルクス

2章 ヘーゲル学徒

3章 パリ亡命(1843.10-)

4章 盟友エンゲルス

48年革命と共産同47-53

5章 ブリュッセル亡命
(1845.02-)

6章 革命(1848)と反革命

7章 ロンドン亡命(1849.08-)

8章 エンゲルス＝マルクス盟
友関係

**ジャーナリストと経済学研
究**

9章 クリミア戦争と恐慌

10章 王朝的変革

盛期マルクス

11章 IWA発端(1864発足)

12章 資本論(第1巻初版
1867)

13章 IWA全盛期

14章 IWA衰亡(解散1873)

晩期マルクス

15章 晩年の10年(1873-83)

マクレランとリュベルの時期区分

マクレラン『マルクス伝』
(原1973)

- I. トリーア、ボン、ベルリン
- II. パリ(1843.10-)
- III. ブリュッセル(1845.02-)
- IV. ケルン(1848.04-)
- V. ロンドン(1849.08-)
- VI. 「経済学」
- VII. 国際労働者協会(1864-73)
- VIII. 晩年の10年(1873-83)

M.リュベル/M.マネイル
「神話なきマルクス」(原1975)

- I. 1818-1843
トリーア、ボン、ベルリン、ケルン、
クロイツナッハ
- II. 1844-1849
パリ時代から48年革命まで
- III. 1850-1856
ロンドンでの亡命生活
- IV. 1857-1863
経済学研究再開
- V. 1864-1872
IWA時代、資本論第1巻初版67
年
- VI. 1873-1883 晩年の10年

晩期マルクス(1873-83)の主な仕事

- (1871 『フランスの内乱』)
- (1872 アムステルダム演説)
- (1872-73 ドイツ語第2版『資本論』第1巻)
- (1872-75 フランス語版『資本論』第1巻)
- 1874 バクーニン『国家と無政府』摘要
- 1875.05 『ゴータ綱領』批判
- 1876.03-06 マウラー・ノート
- 1877.11 オテーチュストヴェンヌイエ・ザピスキ編集部への手紙
- 1877-81 『資本論』第2部第8稿執筆
- 1879.10-1880.10 コヴァレフスキー研究、インド史研究
- 1880-81冬 モーガン『古代社会』を抜萃
- 1881.08-09 植民地諸民族の歴史抜萃
- 1881末-1882 世界史研究、BC1C-17C年表作成
- 1881.02-03 ザサーリッチへの手紙草稿
- 1882 露語版『共産党宣言』第2版序文(Engelsと共同執筆)

マルクス『経済学批判』(1859)「序言」A

段落①②『経済学批判』の全体構成プラン

段落③言論上の略歴、『ライン新聞』まで

段落④前半 ヘーゲル『法哲学』批判の成果としての「短い定式」

「法諸関係は国家諸形態と同様、それら自身から、あるいは人間精神のいわゆる普遍的発展から概念把握されるのではなく、むしろ物質的生活諸関係——その総体をヘーゲルは18世紀の英国人やフランス人の先例に従い「ブルジョワ社会」として総括したのだが——の中に根をもっている。だが「ブルジョワ社会」の解剖学は政治経済学の中に求められるべきである。」

段落④後半 その後の研究の「一般的帰結」かつ「導きの糸」としての(長い定式)

前段:近代社会の共時的な構造

中段:「社会革命の時代」

後段:「経済的社会構成体」転変の視点で描かれた人類史図式

段落⑤『ドイツ・イデオロギー』などエンゲルスとの協働

段落⑥『新ライン新聞』、ロンドンでの経済学研究再開、『ニューヨーク・トリビューン』寄稿

「定式」前段：近代社会の共時的な構造

- 【a-1】人間たちは彼らの生活の生産において、特定の、必然的な、彼らの意志から独立な諸関係、つまり彼らの物質的な生産諸力の特定の発展段階に照応する生産諸関係に入り込む。
- 【a-2】生産諸関係の総体が社会の経済的構造、つまりその上に法律的政治的上部構造がそびえたち、特定の社会的意識諸形態がそれに照応する実在的土台を形成する。
- 【a-3】物質的生活の生産様式は社会的(sozial)[生活過程]、政治的[生活過程]、精神的生活過程一般を条件づける。
- 【a-4】人間たちの意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する。

「定式」中段:「社会革命の時代」(上)

- 【b-1】社会の物質的生産諸力はその発展の一定の段階で、それまでその内部で生産諸力が運動してきた現存の生産諸関係との、あるいはその法律的表現にほかならない所有諸関係との、矛盾に陥る。
- 【b-2】これら諸関係は生産諸力の発展諸形態から桎梏に転化する。
- 【b-3】その時、社会革命の時代が到来する。
- 【b-4】経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造の全体が、ゆっくり、あるいは急激に変革する。
- 【B-5】かかる変革の考察に際しては、常に、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に忠実に確認されうる変革と、法律的、政治的、宗教的、芸術的、哲学的な、要するに人間たちがその内部でこの抗争を意識し、闘い決するイデオロギー的な諸形態における変革とを区別しなければならない。

「定式」中段:「社会革命の時代」(下)

- 【b-6】ある個人が何者であるかを、その個人が自分について考えていることに基づき判定しないのと同様、この変革の時代をこの時代の意識から判定せず、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係の現存する衝突から説明しなければならない。
- 【b-7】ある社会構成体は、すべての生産諸力がその中で発展の余地がないほどに発展してしまう以前には、決して没落しないし、新たなより高度な生産諸関係は、その物質的実存条件が旧社会自身の胎内で孵化し終えるまでは、[古いそれに]取ってかわることはない。
- 【b-8】したがって人類は常に解決可能な課題のみを自分に立てた。というのはより詳細に考察すると、課題自身はその解決の物質的諸条件がすでに現存するか、少なくともその生成の過程にあると概念把握されているところでのみ発生するからである。

「定式」後段:「経済的社会構成体」転変の視点 で描かれた人類史図式

- 【c-1】概略すれば、アジア的、古代的、封建的、そして近代ブルジョワ的な生産諸様式が、経済的社会構成体の前進する諸時代として、目印となる(*bezeichnet werden*)。
- 【c-2】ブルジョア的な生産諸関係は社会的生産過程の最後の敵対的形態である。
- 【c-3】この社会構成体とともに人間社会の前史(*Vorgeshichte*)が閉じる

1859年「定式」の限界

- (1) エンゲルスは『経済学批判』への書評(1859年8月)で「このドイツ[マルクス]経済学は本質的に唯物史観に基づいて」おり、その根本は「序言」に書いてあると確認している。
- (2) しかしマルクスは先行した自分の研究から「一般的帰結」の若干を定式化し、以降の研究に役立てる「導きの糸」として機能させていることをここで確認しているだけである。「唯物史観」(という表現をマルクスは使っていないが)をここで提示しようとしているわけではない。
- (3) 「定式」のあとマルクスは24年も生きているのだから、「定式」はあくまで1859年時点の暫定的「定式」と見ておくことは不可欠である。
- (4) 土台/上部構造のような建築論的比喩の限界と「生活過程論」的テーゼの並存の問題。
- (5) 生産諸力/生産諸関係の相互関係理解では、生産諸力が自立系の進歩尺度と見られる誤認の余地を残している。
- (6) アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョワ的の生産様式の転変図式は要綱の「資本主義に先行する諸形態」を前提しているにせよ、60年代や70年代のマウラー研究をはじめとする共同体研究などを受けて、どう再構築されるべきか。

マルクスと「生産諸力」

- (1) 影響史的研究では植村邦彦『シュルツとマルクス』1990、新評論、が詳しい。統計学、革命的民主主義、労働者解放、反共産主義、反思弁的解放論
- (2) 啓蒙やヘーゲル歴史哲学の「理性」にかわる歴史進歩の自立系尺度 VS 脱「万能の合鍵」=脱歴史哲学
- (3) 生産諸力の破壊諸力への転化、結合労働=社会的諸力をめぐる権力VSアソシエーション
- (4) 「必要な」生活手段(およびそれに必要な生産手段)の再生産に「必要な」社会的労働時間の短縮→自由時間の拡大→自己統治と自己目的活動
- (5) マルクスの「豊かさ」論。資本主義的欲求構造との闘争なしに解放論は不成立→エコマルクス主義の成立根拠。
- (6) 生産諸力と経済成長の混同。
- (7) 18世紀まつから19世紀にかけての「産業革命」と20世紀60年代に始まる情報革命。

マルクスのマウラー研究(1868, 1876)

1868年3月14日と25日

エンゲルスへの二通の手紙で初めてマウラーに言及、この直後からマウラー『マルク・ホーフ・村落・都市制度および公権力の歴史序説』(1854)の詳細な抜萃を作成

1876「マウラー・ノート」

B133ノート

- ① 上記1854年の『序説』からの二度目の抜萃(S.4-45)
- ② 1856年の『マルク制度の歴史』からの抜萃(S.46-81)
- ③ 1862年の『Fronhöfeの歴史』からの抜萃(S.82-95)

B134ノート

- ④ 1862年の『Fronhöfeの歴史』からの抜萃(S.3-95)

B135ノート

- ⑤ 1862年の『Fronhöfeの歴史』からの抜萃(S.3-15)
- ⑥ 1863-66年の『ドイツにおける村(Dorf)制度の歴史』からの抜萃(S.15-44)

マウラーとマルクス

マウラーの主要著書

- 1854『マルク、ホーフ、村、国家制度の歴史と公権力の歴史への序文』
- 1856『ドイツにおけるマルク制度』
- 1862『ドイツにおけるフロン・ホーフ、農民ホーフの歴史とホーフ制度の歴史』全4巻
- 1865『ドイツにおける村制度の歴史』全2巻
- 1869『ドイツにおける都市制度』全4巻

平子友長らの研究

- 2013.08 平子友長「ザスーリッチへの手紙」季報『唯物論研究』第124号
- 2013大谷・平子編『マルクス抜萃ノートからマルクスを読む：MEGA第IV部門の編集と所収ノートの研究』桜井書店、2013、所収
浅川雅己「マウラーの〈マルク共同体〉研究とマルクス」
平子友長「マルクスのマウラー研究の射程——MEGA第IV部第18巻におけるマルクスのマウラー抜萃の考察」
- 2019.12「マルクスの歴史把握の変遷——市民社会論マルクス主義批判」、伊藤・大藪・田畑編『21世紀のマルクス』所収

フランス語版『資本論』(1872-75)の変更点

- (1) 資本主義の「前史 (Vorgeschichte)」である「いわゆる本源的蓄積」について初版(1867)では「その歴史は様々な国により様々な色合いを帯び、様々な系列における[また様々な歴史時代における＝第2版付記]さまざまな局面を経過する。我々は実例として採用するイギリスにおいてのみそれは古典的形態をとるのである」(MEGAII-5-576)
- (2) ところがフランス語版は次のように限定している。「この収奪が徹底的な仕方で遂行されたのは今のところイギリスにおいてだけである。だから我々の[収奪史の]素描においてイギリスが主役 (le premier rôle) を演じるだろう。だが西ヨーロッパの他の国々もすべて同じ運動を通過しているのであって、異なるのはこの運動が環境に応じて (selon le milieu)、地域的な色合いが変化し、より狭い範囲に閉じ込められたり、あまり目立たない特徴を示したり、他とは異なる順序をたどるだけである」(MEGAII-7-634) [グラムシの受動革命論など参照]
- (3) もう一つ、体制 (le système) が確立したのちに「累進的規模で再生産される (reproduit sur une échelle progressive)」再生産的歴史運動と、この体制の発生 (la genèse) の運動である発生的歴史運動 (前史的 préhistorique 運動) が区別される。『資本論』初版序言などで強調される「資本家的生産の自然法則」(MEW23-12)などは前者を指すものである。

ザスーリッチへの手紙(1881)関連

- ①1877年オテーチュストヴェンヌイエ・ザピスキ第10号にミハイロフスキー「ジューコフスキー氏に裁かれたカール・マルクス」掲載
 - ②1877.11 マルクス、オテーチュストヴェンヌイエ・ザピスキ編集部への手紙(投函されず)
 - ③1881.02.16付V.ザスーリッチのマルクス宛手紙
 - ④マルクスの回答下書き
 - 第1草稿(MEGA I-25-219、MEW19-384)
 - 第2草稿(MEGA I-25-231、MEW19-396)
 - 第3草稿(MEGA I-25-235、MEW19-401)
 - 第4草稿(MEGA I-25-240)
 - ⑤1881.03.08付マルクスのV.ザスーリッチ宛手紙(MEGA I-25-240、MEW19-242)
- なお大月全集版は平田清明が『マルクス、エンゲルス・アルヒーフ』第1巻(1924)の伝語原文から訳出

ザスーリッチへの手紙関連の注目すべき諸点(A)

- (1) 各社会が置かれている「歴史的環境」「歴史的状況」を含む「特殊研究」なしの、「万能の合鍵」としての「歴史哲学的一般理論」化が拒否される (MEGA I-25-117)。
- (2) 資本主義化の歴史的不可避性認識はフランス語版『資本論』で「西ヨーロッパ (l'Europe occidentale)」に限定される (MEGA I-25-116)。
- (3) あるシステムが生成する「発生」(la genèse) の論理と、一旦成立したシステムが拡大再生産されていく「累進的再生産 (reproduit sur une échelle progressive)」の論理が明確に区別される (MEGA II-7-632)。後者は初版『資本論』序言などで「経済的社会構成体の展開を一つの自然史的過程として捉える」(MEW23-16)とされるものである。
- (4) しかし前者は、「ブルジョワ世界の前史時代」であって、封建制の解体過程で、一方の商業資本家的貨幣蓄積、他方の生産手段から暴力的に分離された労働者大衆という二つのエレメントが、一定の「歴史的環境」下で、偶発的創発的に結びつき新たな循環軌道にのるという「歴史的運動 (le mouvement historique)」から説明される。(MEGA II-7-633)
- (5) 農民からの土地の収奪が徹底的に行われたイギリスがこの前史で「主役を (le premier role) を演じる」が、西ヨーロッパの他の国々も同じ運動を経過していても、「歴史的環境」の差異に応じて地域的色彩、収奪の範囲、順序などに差異が生じる。[グラムシの「受動革命」論参照]

ザスーリッチへの手紙関連の注目すべき諸点(B)

- (6) 西ヨーロッパ以外についても、「より高次な文化」を持ち、「世界市場を支配する西欧」との「同時存在 (la contemporaine) 」(MEGA I-25-220) が注視される。つまり異なる発展段階にある諸社会が歴史空間で並存し相互媒介しているあり方が、歴史的生活過程で決定的に重要な問題として浮上する。
- (7) 東インドの場合、英国による征服の餌食となり、伝統的共同体の暴力的破壊が土着農業を破壊し飢饉を深刻化した(MEGA I-25-238)。
- (8) ところがロシアでは世界でも唯一、「農業共同体 (la commune agricole) 」が全国規模で維持されている。これは「原古的 (archaïque) 共同体」の衰退系列の最近の形態である。そこではこの「農耕共同体」が孕む私的所有のエLEMENT(家屋と付属地の私有)と集団的所有のエLEMENT(畠の共有と定期的再分割)のどちらが勝利するかにかかわる「オルタナティブ (alternative) 」を許している(MEGA I-25-224)。
- (9) このオルタナティブを条件づけるのは「歴史的環境 (milieu historique) 」であり、1861年の農奴解放令の線に進むと農業共同体の崩壊と農民のプロレタリア化は不可避であるが、逆に「農業共同体」が同時存在である資本主義的生産の肯定的諸成果を「集団的生産」のエLEMENTとして利用し、直接(資本主義を経由せず)発展することも、否定されない。

ザスーリッチへの手紙関連の注目すべき諸点(C)

(10)「農村共同体」を発展させることにより維持するというこのオルタナティブでは、「ロシア社会の再生」(削除部分)の路線で、ポスト資本主義をめざす歴史運動が展開されることになる。

(11) 少し一般化すると歴史空間には、

① dominant, herrschend, hegemonicな諸形態、

② complement (補完)の諸形態

③ opposite、oppositionellな諸形態

④ 周辺のperipheralな諸形態

⑤ surviving古層的な諸形態

が同時的contemporalyに併存coexistしている

「歴史的生活過程」と歴史学

- (1) 「歴史的生活過程」は「マクロな変容過程として見られた総過程としての生活過程」であって、生活過程の自生的自覚的、上向的下向的、改良的革命的、循環的危機的、破局的回復的な変容過程を指す。
- (2) 従って「歴史学」の対象と重なる部分は大きいが、「歴史学者」が専門知でこの過程を主に過去に焦点をあて、周到なデータ収集と処理で対象に迫る（現在のための教訓を得るためとはいえ）のとは異なる。
- (3) すべての集団や個人は「歴史的生活過程」を自覚的無自覚的、安定的危機的に現に「生きる」のであって、「歴史的生活過程」は単なる研究対象なのではないし、単に過去を認識する活動でもない。
- (4) とはいえすべての生活者たちは過去に学びつつ、未来を構想しつつ、現在を安定的・危機的・変革的に生活し続けるのであるから、精神的生活過程の一領域である歴史学が、歴史意識の他の諸形態と並んで、「歴史的生活過程」の不可欠の契機であることは疑う余地がない。

Geschichte (出来事としての歴史)と History (語りとしての歴史)

(1)「出来事」としての歴史

× 無変化、さらには純粹循環変化

○ 何らかの意味で「展開 (Entwicklung)」や「生成 (Werden)」、つまり質的変化を伴う事象

(2)「語り」としての歴史

- ① 言語、とりわけ文字文化や知識人集団の成立を前提にし、
- ② 諸事実、諸事態、諸事件を伝承・記録し、
- ③ それらの現在にとっての意味や教訓を確認し、
- ④ さらに権力集団や反権力集団の自己正当化機能を担う。
- ⑤ 「語り」の主体は、当事者、生き証人、家族伝承、民間伝承 (folklore)、国史編纂者、歴史家、思想家や文学者などさまざまである。

「歴史的事実」について

- (1) 事実の捏造、隠ぺい、隠滅
 - (2) 未確認情報(伝聞、うわさ、推測)
 - (3) 確認された事実でも無意識的・意識的選択が働く
 - 好都合 (convenient) → 強調
 - 不都合 (inconvenient) → 避ける
 - 周到な事実収集と相互対照が不可欠
 - (4) 歴史的に意味ある (significant) 事実
 - 歴史的に意味ない事実
 - × 「事実が自ら語る」(実証主義史学の誤り)
 - 「歴史家が呼びかけたときだけ事実語る」
 - 歴史家の問題意識、パースペクティヴ、文脈の問題
- (E・H・カー『歴史とは何か』(原1961、岩波新書)第1章)

「生成の論理」と「構造の論理」

生成の論理

偶然 → 反復 → 構造化 → 危機
(たまたま) (繰り返す) (安定する) (不安定化)

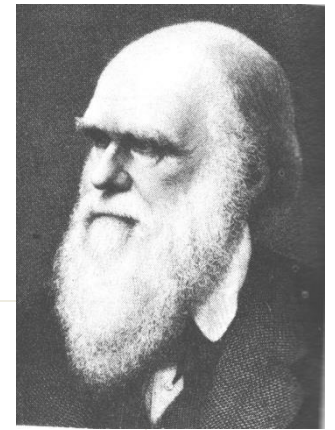
構造の論理 ○ structural(構造的)

○ feedback(結果の原因への帰還)

× lineal(直線的)

○ contingent(偶発的) ○ emergent(創発的)

進化論の論理



Charles Dawin 1809-1882

『種の起源』初版、1859年

- (1) 生物種の生存環境は不断に変動する。
- (2) すべての種はその内部に多様な形質、変異を含んでいる。
- (3) 環境変動に適合した形質、変異は増殖し、そうでないものは淘汰される。

現代的解釈は次の通り。

- (1) 遺伝子にはランダムな変異が生じる。
- (2) これに自然選択が働く。
- (3) 選択で選ばれた変異は次世代に遺伝する。